

特集 2020年ランドスケープコンサルタンツ協会賞(CLA賞)



一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会

会 長：金清典広
副会長：小林 新・宇戸睦雄・大杉哲哉
事務局長：狩谷達之

〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル8F
TEL：03-3662-8266 FAX：03-3662-8268
HP：http://www.cla.or.jp e-mail：info@cla.or.jp

支部事務局

北海道支部	〒060-0808 札幌市北区8条西3丁目28番地 (株)ドーコン内
支部長：福原賢二 事務局長：大塚英典	TEL：011-801-1535 FAX：011-801-1536
東北支部	〒010-0973 秋田市八橋本町4-10-26 (株)緑設計内
支部長：板垣清美	TEL：018-862-4263 FAX：018-862-4273
関東支部	〒103-0004 東京都中央区東日本橋3-3-7 近江会館ビル
支部長：光益尚登	TEL：03-3662-8266 FAX：03-3662-8268
中部支部	〒451-0042 名古屋市西区那古野2-11-23 中央コンサルタンツ株式会社 内
支部長：三浦利夫 事務局長 石黒茂樹	TEL：052-551-2541 FAX：052-551-2540
関西支部	〒530-0014 大阪市北区鶴野町4-11-1106 株式会社エス・イー・エヌ環境計画室 内
支部長：西辻俊明 事務局長：津田主税	TEL：06-6373-4117 FAX：06-6373-4617
九州支部	〒810-0001 福岡市中央区天神2-14-38 株式会社緑景 九州事務所 内
支部長：大杉哲哉 事務局長：谷山恵一	TEL：092-713-8765 FAX：092-713-8759

一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 基本理念

我々の使命は、新たな環境認識のもとに、
人と自然との関係を科学的、芸術的に把握し、
環境と調和・融合した新しい秩序づくりに積極的に挑戦することによって、
安全で豊かな環境の創出、
すなわち、「みどりの環境文化」の形成に寄与することです。

1

ランドスケープアーキテクチャーの専門家集団

我々は、日本におけるランドスケープアーキテクチャーの思想と技術を
継承し、発展させるために組織された専門家集団です。

2

新しい技術の開発と研鑽

我々は、来たるべき21世紀の社会に対する責任を十分認識し、
技術の高度化と多様化に対応した新しい技術の開発と研鑽を推進し、
技術競争の時代に対応します。

3

社会的信頼を獲得

我々は、社会的倫理観のもとに、公正な技術競争を通し、
内外の要請にも応えられる自立した職能として社会的信頼を獲得すべく行動します。

4

開かれた技術団体

我々は、内外の関連技術者との交流を通して、協調関係を積極的に推進し、
多様な価値観を内包する開かれた技術団体として広く展開します。

5

魅力ある創造的職能

我々は、経営体質の向上と安定を図ることによって、魅力ある創造的職能として
広く社会から信頼されることをめざします。

平成7年5月
「新しい環境文化の創造 ―造園コンサルタントビジョン―」より



特集：2020年 ランドスケープコンサルタンツ 協会賞 [CLA賞]

最優秀賞

【設計部門】

高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設 2

優秀賞

【設計部門】

宮ノ丘幼稚園 4

【設計部門】

第36回全国都市緑化信州フェア
信州花フェスタ2019 6

【設計部門】

第37回全国都市緑化ひろしまフェア
ひろしま はなのわ 2020 8

【マネジメント部門】

千葉市ふるさと農園の管理運営 10

特別賞

【設計部門】

築地川公園～都心の街区公園の改修 12

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし 14

2020年CLA賞 受賞技術者プロフィール 15

[特集]

地域づくりの核となるランドスケープ 19

・南町田グランベリーパーク
～すべてが公園のようなまち～ 20

・新宿中央公園の魅力向上に関する取り組みについて 24

・里見公園
～住宅地の中で地域とともにある公園～ 28

・公園と店舗が一体となった日本最大級のPark-PFI事業
「Hisaya-odori Park」が2020年秋誕生
発信性と日常性を併せ持つ、名古屋の新しいシンボルへ 32

会員名簿 36

表紙のPhoto Story

表紙デザインは、2020年CLA賞の受賞
作品6点の写真をコラージュしたもので、
シンボリックな空間演出から花の景、身
近なみどりの活用事例、林間で遊ぶ子供
たち、そして、時代のニーズに合わせて
リニューアルされた公園など、様々な写
真が集まりました。
人々の生活の質を高め、そのための基盤
としての緑の空間を保全・創造していく
ことがランドスケープという仕事です。こ
れからも私たちの職能を社会にアピール
し、より良い環境づくりに貢献していきま
しょう。



最優秀賞

設計部門



高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設

株式会社ブレック研究所
奥山伊作・前澤洋一・酒井 学・森田 緑・宮脇侑子

高田松原津波復興祈念公園は、東日本大震災が未曾有の大災害であったことを鑑み、国・岩手県・陸前高田市が連携し、復興の象徴として整備するものである。このうち、国が整備する国営追悼・祈念施設は、閣議決定された、①東日本大震災による犠牲者への追悼と鎮魂、②震災の記憶と教訓の後世への伝承、③国内外に向けた復興に対する強い意志の発信の3つを目的

とした本公園の中核を成す施設である。本作品は、令和元年9月22日に一部開園した「祈りの軸」を中心とする約2.0haのエリアを対象としている。

我々は、国営追悼・祈念施設の造園土木（エリア全体）の基本・実施設計を行うとともに、管理棟（道の駅高田松原+東日本大震災津波伝承館）の建築設計を内藤廣建築設計事務所との設計共同体で行った。

基本設計では、「空間デザイン検討委員会」（委員長：篠沢健太 工学院大学教授、副委員長：平野勝也 東北大学准教授）

作品概要
作品名—— 高田松原津波復興祈念公園 国営追悼・祈念施設
所在地—— 岩手県陸前高田市
発注—— 国土交通省東北地方整備局建設部 及び 国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所
設計—— 株式会社ブレック研究所
設計協力—— 株式会社内藤廣建築設計事務所（建築設計共同体） 株式会社復建技術コンサルタント（土木構造設計補助）
監理—— 国土交通省東北地方整備局東北国営公園事務所 ブレック研究所・内藤廣建築設計事務所設計共同体
施工—— 西松建設株式会社、大成設備株式会社、株式会社四電工、株式会社平野組、小岩井農牧株式会社、株式会社伊藤組、株式会社相友建築、シブコー東日本株式会社、有限会社金野鉄工所
設計期間—— 基本計画期間：2014年7月～2015年3月
設計期間：2015年7月～2019年3月（造園土木・建築に関わる基本・実施設計等の合計）
施工期間—— 2017年10月～2019年6月
規模—— 約2.0ha（「祈りの軸」を中心とする一部開園エリア）
主要施設—— 祈りの軸：園路、献花の場、人道橋、海を望む場
園地等：築山、芝生広場（イベント対応）
建築：管理棟（道の駅高田松原+東日本大震災津波伝承館）

作品評
本作品は、東日本大震災の被災地に計画された、震災復興の象徴となる津波復興祈念公園の中核施設となる「国営追悼・祈念施設」のランドスケープ及び建築の基本・実施設計を行ったものである。
施設の特性から、「追悼・鎮魂・震災の伝承・復興の意志」などの思いを伝える神聖な空間をデザインで表現することに加え、建築物との調和や海岸防潮堤の津波対策などの多岐にわたる対応が求められたが、応募者は、海に通じる切通し空間の形成やコンクリートの形状を持つ祈りの軸の配置、追悼・鎮魂の3つのスクウェアの配置、独自構造の防潮堤づくりなどでこれらの要請に応え、空間と建築物が一体化した追悼・祈念の空間を見事に表現している。
本作品に対しては、敷地の活かし方など5つの選考視点全てで満点に近い評価がなされ、最優秀賞となった。

設計部門



でデザイン検討を進め、実施設計では、基本計画当時の内藤廣委員をアドバイザーに迎え、細部に至る議論を重ねながら、造園、土木、建築の垣根を越えた一体的な検討を行った。

国営追悼・祈念施設は、津波の来襲した広田湾から津波が遡上した気仙川へと至る「祈りの軸」を中心に、奇跡の一本松、震災遺構タピック45（旧道の駅）、海岸防潮堤等と一体となった追悼の広場で構成している。

かさ上げ市街地側の日常空間と追悼と鎮魂の非日常空間の境界として管理棟を配し、両翼の築山による凹状の地形と海側へ

絞り込まれた切通し壁により、「祈りの軸」を象徴的に表現している。

また、園路の縁取りや人道橋の高欄形状による軸線の強調、縁石等の日常的な素材感の排除等により、「祈りの軸」を明快なラインとして仕立てている。

さらに「祈りの軸」では、神社における鳥居・手水舎、拝殿、奥宮のように、3つのスクウェア（管理棟ゲート部・献花の場・海を望む場）を置き、追悼と鎮魂の憶いを徐々に深化させる場を形成している。



優 秀 賞

設計部門



宮ノ丘幼稚園

高野ランドスケーププランニング株式会社

赤嶺太紀子・金清典広・高野文彰・上田悦路・村田周一・山地弘起

「むらのような幼稚園を目指して」

この幼稚園は都市部にありながら、敷地は森、草原、水辺という豊かな自然を包括しています。幼稚園は子どもの暮らしの場であり、この時期に培った感性が将来の成長に大きく影響するため、心身の健やかな成長を支える環境が重要です。

宮ノ丘の教育理念と結びつく「感性と野生と知性を育む場」の具現化に向けて、人と自然がお互いに良い関係で影響あって生きる里山や、年齢や目的の異なる様々な人が集い支え合うコミュニティが想起され、これらを含む「むらのような幼稚園」を目指すことになりました。



4つの基本的な考えと、

むらのような幼稚園づくりへ向けたプロセス

「野生・健康を育む」「感性を育む」「創る喜びを知る」「人とつながりを育む」

これらを4つの基本的な考えとして、計画・設計・工事を進めました。並行して全てのフェーズで教員や保護者、園児、地域住民、大学生らを含む参加型プログラムを取り入れ、多くの人々が幼稚園に集い、愛着をもち、ともに子どもを育む場の実現に近づくように進めました。

作品概要

作品名 宮ノ丘幼稚園
 所在地 北海道札幌市西区宮の沢490-11
 発注 景盛学園宮ノ丘幼稚園
 設計 高野ランドスケーププランニング株式会社 (マスタープラン、ランドスケープ) 株式会社象設計集団(建築)
 設計協力 海外からのインターンシップ学生(カナダ、スコットランド、レバノン、フランス、モンゴル、カナダ、韓国)、札幌近郊の大学生・専門学校生ボランティア
 監理 高野ランドスケーププランニング株式会社
 施工 原田建設株式会社、株式会社住計画FURUTA、大成ロテック株式会社、株式会社横山造園、有限会社かわい造園、左官・久住章氏
 設計期間 2006年8月～2008年11月 第一期
 2014年6月～2014年12月 第二期
 2019年4月～第三期継続中
 施工期間 2007年11月～2008年11月 第一期
 2014年8月～2014年12月 第二期
 規模 2.4ha
 主要施設 ランドスケープ:丸馬場、沢の遊び場、丘のグレンデ、菜園、グラウンド、グリーンハウス(プール、人工芝グラウンド、大型バス駐車場)、ピオトープ池、駐車場、ゲート
 建築:東棟、中央棟、水辺のコテージ、アフタースクール棟、馬小屋

作品評

札幌市郊外の手稲山の山裾部に立地する老朽化した幼稚園のリニューアル事業である。応募者はプロジェクト全体を統括し、基本構想から実施設計まですべてを担当した。

少子社会を踏まえて、新しい幼稚園像を構築するコンセプトを「むらのような幼稚園」とし、教師や地域を巻き込んで幼稚園のマスタープランを作成した。敷地は、「森」、「草原」、「水辺」に区分して、斜面地の自然環境を壊さないように建物を分散配置している。改修事業を通して、ワークショップを企画・運営して、遊び場づくりなどを通じて教職員に野外活動に対する意識変化をもたらし、森の整備や花壇整備等の活動を通して親土のコミュニティ育成の効果があった。園児が帰宅する午後は小学生や大人向けのプログラムを行い、地域における幼稚園のポテンシャルの拡大を図っている。

新たな幼稚園のビジョンを掲げて、空間のデザイン、運営のデザイン、コミュニティのデザインにまでいたる意欲的な取り組みである。わが子をこのような幼稚園に通わせられる親は幸せ者である。



①上流はピオトープ、下流は遊びのための沢。幼稚園職員と一緒に施工したことで先生自慢の遊び場になった
②沢遊び場をワークショップで整備 ③先生が積極的に外で授業を始める ④広いスロープの草地は子どもたちの日常の遊び場
⑤丘は冬にはスキーのグレンデになる ⑥⑦保護者と森の手入れワークショップにより活動の場を広げる ⑧子どもたちもいきいきと森で遊ぶ

自然環境をベースにした敷地計画

敷地は斜面地に位置するため、分棟にしてこの敷地の3つの自然的特徴のある場所にそれぞれを配置することになりました。これによって子どもたちが日々の自然の変化を体を感じ、屋内と屋外を行き来し、積極的に自然と関わる環境を創りだしています。屋内外に行き来が増えることは冬季の雪の中の移動を考えると勇気が必要とする選択でしたが、体温調節機能が強くなり、子どもたちはたくましく育っています。そして多様な自然との関わりから現代に失われがちな「野生」「感性」を育てています。

宮ノ丘のさらなる発展を目指して

第1期工事完了後の10年間で、幼稚園は新しい環境をベースにプログラム開発と人材育成に力を注ぎ、着実に成果を上げてきました。今では幼稚園以外の目的でこの場所を訪れる子どもも増え、屋外環境の利用頻度は高まり、活動内容も自然に親密な宮の丘の個性ある活動に育っています。そこで現在はさらに高いレベルで環境を活用した教育に取り組むため、「第3期」として新たな計画に取り組んでいます。日々の活動と森の環境が一層強く結びついた場づくりを目指していく構想を進めています。

設計部門



優 秀 賞

設計部門



第36回全国都市緑化信州フェア 信州花フェスタ2019

株式会社 KRC

小林真幸・藤村忠志・三澤陽平・田口ちはる・亀山 涼・長峯史弥・宮入賢一郎

株式会社 空間創研

宇戸睦雄・後藤逸成・荘田隆久・古屋 章・泉 崇・多田祥子・山川弘子・徐 蓉

フェアの概要

第36回全国都市緑化信州フェア信州花フェスタ2019は、「北アルプスの麓から広がる花と緑に包まれたしあわせ暮らし」をテーマとして、平成31年4月25日から令和元年6月16日までの53日間、開催されました。

本フェアは、「信州らしい緑化意識の高揚」、「花と緑に囲まれたうらおいのあるまちづくりの推進」、「緑化によるにぎわい

の創出」、「緑化の推進力となる人材の育成」を開催意義に掲げ、緑化推進に留まらず花緑を繋ぎ役として地域産業、観光の振興、まちづくりを支える人的ネットワークの拡充・持続等を目指しました。

信州らしいランドスケープへの気づきと新たな価値の創造

メイン会場は北アルプスを背景とした松本平の広がりや既存のアカマツ林を活かし、北アルプスの山麓部に位置するサブ3会場は豊かな自然環境の魅力を最大限に活用した会場計画により、信州の自然景観・環境ストックと調和する花緑と活動による新たな価値付けを行いました。

作品概要

作品名—— 第36回全国都市緑化信州フェア信州花フェスタ2019
所在地—— メイン会場：長野県松本平広域公園ターミナルゾーンほか〔松本市〕、サブ会場：国営アルプスあづみの公園堀金・穂高地区〔安曇野市〕、同大町・松川地区〔大町市〕、県営高川渓谷緑地〔安曇野市〕、グリーンシェアスポット：長野県内一円
発注—— 第36回全国都市緑化信州フェア実行委員会
設計—— KRC・空間創研 設計共同体
設計協力—— メイン会場：越 洋子（越ガーデンデザイン事務所）サブ会場：矢澤秀成（やざわ花育種株式会社）
監理—— KRC・空間創研 設計共同体
施工—— 南アルプス造園、株信濃美植、株信州グリーン、南信州緑地、株緑化センター
設計期間—— 2016年12月～2019年6月（基本計画、実施計画、実施運営・監理含む）
施工期間—— 2018年8月～2019年5月
規模—— 約24ha
主要施設—— 県民協働による展示空間、主催者による展示空間、企業団体・自治体等による出展空間、催事空間、会場修景花壇及びフェア会場の諸施設・建築物等

作品評

本作品は、全国都市緑化信州フェアが開催されたメイン会場及びサブ会場の基本設計・実施設計と管理・運営を行ったものである。このうちメイン会場の空間構成は、「信州らしさの体感・創造・交流」をキーワードとする4つのエリアと「展示・出展・催事・協働」のコンテンツが重なり合う9つのゾーンで構成されている。各ゾーンで工夫を凝らした緑の演出が見られるが、特に北アルプスを背景に丘の起伏を活かして整備された大花壇の「北アルプスの花の丘」は、信州フェスタを成功に導いたメイン施設としてデザイン的にも優れた空間となっている。また、会場内の動線配置も眺望点や各ゾーンへの移動がスムーズな構成となっている。本作品に対しては選考視点毎の評価は分かれたが、総合的な評価点が高く優秀賞となった。



メイン会場：①はじまりの花庭 ②芸術と花の森（県外自治体出展）③北アルプスと花の丘 ④信州彩園 ⑤しあわせ暮らしの庭めぐり
サブ会場（堀金・穂高地区）：⑥ウェルカム花壇 サブ会場（大町・松川地区）：⑦フラワーウォール ⑧シェードガーデン

多様な主体が参画するフェアの実践

フェアを持続可能な緑化推進の普及・啓発の契機とするために、体感・創造・交流の3つを展開方針に沿って、計画段階から県民、企業、団体らの主体的な参画による協働の取り組みを幅広く展開し、多様な主体による設計、施工（整備）、維持管理を実践しました。

全国都市緑化フェア初の高地での春開催

高地で行われる初の春開催フェアとして、信州の春の魅力を伝えるとともに、芽吹きから開花、展葉、春から初夏への花の移ろいなど、会期を通じて花・緑の見どころが継続するよう、気候に配慮した植物の選定、配植、植栽、補植、植え替え等を計画・設計しました。

県民協働による展示を見どころとするフェア

協働の取り組みで生み出した空間はおまけ的なものではなく、「北アルプスと花の丘」や「しあわせ暮らしの庭めぐり」など、フェアの見どころの中核をなす舞台で実践し、高いデザイン性を担保した協働展示として成立させ、人材育成の場としても活用を図りました。

これからの協働・ストック活用と運用の提案

メイン会場では、協働の取り組みを軸に、設計だけに留まらずその前後を含め実践のプログラムや手法を提示し、サブ会場では、既存の公園施設やその周辺の魅力や素材を最大限に活かした見どころの創出手法や信州らしい催事展開のあり方を示しました。

設計部門



優 秀 賞

設計部門



第37回全国都市緑化ひろしまフェア ひろしま はなのわ 2020

「ひろしま百景花壇」
やまの景・雄橋・三段峡
写真撮影：
studio LUCUSS 古田 麗

株式会社ブレック研究所
棚瀬新一郎・山口朋浩
株式会社 LAT 環境クリエイト
青木 晋・森本 直
株式会社 TONZAKO デザイン
松崎 淳・高瀬佐和子

「広島地域資源を活用して、県内全域で回遊と交流を生み出す景観演出」

メイン会場では、世界に誇る広島風景を、「ひろしま百景花壇」として花とモザイカルチャーで精細に再現した。併せて県内自治体出展としてお祭りやイベントなどを表現した「ひろしまお祭りガーデン」を配し、常時県内各地のスポットイベントの情報発信を行うことで、県内各地への来場者の回遊と交流を促す重層的な展開を行った。

全国都市緑化ひろしまフェアは、広島県及び全23市町の主催による全国初のフェアであり、中央公園旧広島市民球場跡地を活用したメイン会場整備と、主催者である各自治体イベントの緑の連携強化を図り、全県展開により開催されたものである。

作品概要

作品名——「第37回全国都市緑化ひろしまフェア
ひろしま はなのわ 2020」メイン会場
所在地——広島県広島市中区
発注——広島市、第37回全国都市緑化ひろしまフェア実行委員会
設計——PREC・LAT共同企業体
設計協力——基本計画・実施計画・メイン会場基本実施設計・監理：
株式会社TONZAKOデザイン
基本計画・実施計画——株式会社グリーンダイナミクス・TSP太陽株式会社
株式会社アシスト・株式会社中国四国博覧堂
施工——はなのわ2020推進共同企業体
設計期間——2018年6月～2020年3月
施工期間——2019年8月～2020年3月

作品評

この事業は、広島県及び県内23自治体すべてが主催者となり、全県展開を試みた都市緑化フェアである。応募者は、会場整備、運営、交通・輸送、展示・出店、行催事、観客誘致・広報宣伝、協働推進等を担うJVの一員として事業にかかわった。県内各地で、「はなのわ会議」を開催して事前準備を行うとともに、緑化フェア終了後を見据えた全県的な花とみどり事業の展開を目指した。広島県及び県内23市町による「お祭りガーデン」等を展開した。特に花については、計画段階での生産者との情報共有による安定供給、植栽段階・維持管理段階でのきめ細かな指導によって花空間の質を高め、維持することができた。さらに花の植栽技術の向上が図られ、来場者の中に花の需要が高まって花産業の振興をもたらす効果があった。平成30年の西日本豪雨災害、令和2年の新型コロナウイルス感染症拡大という2度にわたる困難を乗り越えて為された取り組みに対して、労をねぎらいたい。

設計部門



①「ひろしま百景花壇」やまの景・イザナミノミコト 国内最大級多肉植物モザイカルチャー ②南北の景観軸「未来に向けた思い出年表」
③④「ひろしま百景花壇」さとの景・花田植・棚田 ⑤⑥外周花壇「はなのわ」イングリッシュボーダーミックスによる演出
⑦エントランスロゴ「HANANOWA」 ⑧⑨⑩「ひろしま百景花壇」うみの景・まちの景

「都市に刻まれた記憶を呼び起こす」

旧広島市民球場跡地は、戦後の復興において広島県民の心の支えとなってきた場所である。この旧球場のスタンド形状のアースワークに、かつて広島カーブを応援した人々の賑わいの姿を彷彿させるイングリッシュボーダーガーデンの花植栽を施すことで、「はなのわ」と題した外周立体花壇を創出した。

一方、丹下健三がかつて計画した平和記念公園からつながる南北の景観軸創出を会場内に試み、「未来に向けた思い出年表」として、参加型の短冊メッセージの展示を行い、広島復興と戦後の緑化の歴史や未来への希望を体感できる場とした。

「花とモザイカルチャーで風景を描き出す」

「はなのわ」は長さ500mを超え、イングリッシュボーダーミックス方式を基本として、日本庭園の見え隠れ、遮りなどの風景演出手法を加えることで、奥行き感のある景観演出を行った。「ひろしま百景花壇」では、県内有数の景勝地である「雄橋」や、中国山地に所縁のある伊弉那美命（イザナミノミコト）をモチーフとして、約1万5千鉢の多肉植物を利用した国内最大級のモザイカルチャーを展開した。緑化フェアのメイン会場としての話題性や緑化技術を普及啓発する場として、来場者に強いインパクトを与える仕掛けとした。



優 秀 賞

マネジメント部門



作品概要

作品名—— 千葉市ふるさと農園の管理運営
 所在地—— 千葉県千葉市花見川区三角町656-3
 発注—— 千葉市
 業務目的—— 指定管理者による賑わい創出
 事業期間—— 2019年4月～2024年3月
 事業規模—— 20,443㎡
 主要施設—— ふるさとの館、BBQ場、市民農園等

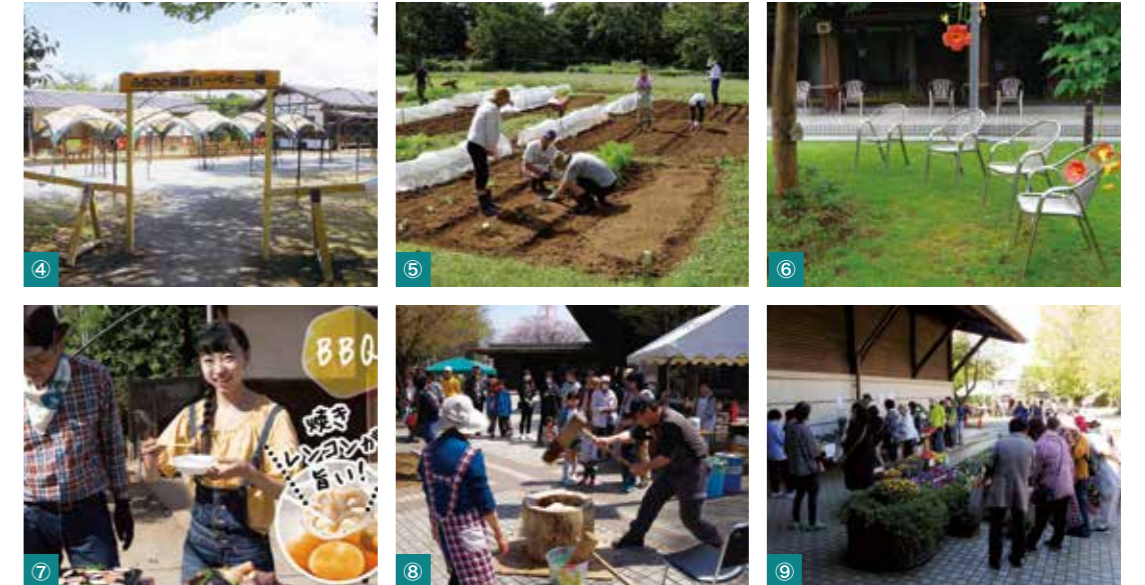
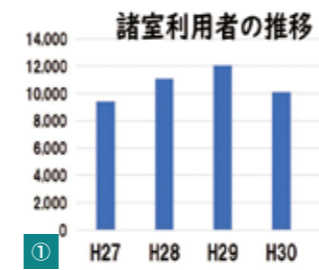
作品評

本作品は、千葉市が「都市と農業とのふれあい拠点」として整備・運営・管理をしてきた「千葉市ふるさと農園」において、民間ノウハウの活用による①賑わいの創出に資する自主事業の展開、②利用者の増加及び満足度の向上、という課題に対応した指定管理者として参画したものである。

応募者は、豊かな経験を活かした提案を行い、参入して1年後には、貸出施設の利用者数や利用者の満足度などの目標値をクリアしている。栽培指導付き市民農園、バーベキュー場、ふるさとカフェ等の新設、フリーマーケットや軽トラ市、餅つきや芋ほり等の多彩なイベントの開催、ベビーベッドの設置、イベントに対応した早朝の施設開放、サインや施設のユニバーサル化といった各種サービスの向上、を進めている。

個々のプログラムに目新しい内容は見えないものの、こうした対応をきめ細かく、丁寧に実施し、確実な成果を上げている点が高く評価された。今後のモデルとして、期待される。

マネジメント部門



①利用者の推移 ②農園全体図 ③満足度の実績 ④BBQ場 ⑤市民農園 ⑥ふるさとカフェ ⑦千葉あそび ⑧春まつり ⑨収穫祭

千葉市ふるさと農園の管理運営

株式会社塚原緑地研究所
 齊藤久芳・佐久間徹・金井拓見・塚原道夫

「千葉市ふるさと農園」は、千葉市都心部の北約7.5キロに位置する「都市と農業のふれあいの拠点施設」です。市民が農作物の栽培、加工実習等の農業体験を通じて、農業を理解するとともに、レクリエーションやコミュニティの場として活用されています。

全面開園から約26年経過した2018年、千葉市は施設の

あり方の検討を踏まえ、「民間のノウハウを活用した利用者の増加と満足度の向上」「市民農園や食の体験等の自主事業による賑わい創出」という新たな目標ミッションを設定し、指定管理者の再公募を行いました。

私たちは、「民間パワーで公共施設を活性化して、地域を元気にする」を基本コンセプトに掲げ、「施設の利用促進の方策」と「賑わい創出のための自主事業」を提案し、選定委員会による審査の結果、次期指定管理者（19～23年度）に選定されました。

2019年4月から指定管理者として、提案内容の具現化に向けて積極に取り組んでおり、市が設定した目標（利用者数）については、今年2、3月に新型コロナウィルスの影響でキャンセルが相次いだものの、初年度から達成することができました。また、利用者の満足度も、市設定目標90%以上に対し、実績98.4%を達成しています。

賑わい創出のための自主事業として、①「バーベキュー場」は古民家跡地等に面積約1,000㎡、席数20席、定員120人の規模で開設し、地域初のBBQ場として高評価、②「栽培

指導付き市民農園」は、圃場の一部に面積約1,500㎡、24区画（5×5m）を開設、栽培指導・種苗・資材・道具等を農園がすべて用意し、初心者でも安心して野菜作りが楽しめるので、子育て世代やシニア世代に好評、③「ふるさとカフェ」は、瀟洒な木造建築に囲まれた芝生の中庭にオープンカフェを開設、「中庭で飲むコーヒーは美味しい」と評判です。いずれも本施設初めての取り組みであり、賑わい創出と利用促進に寄与することが期待されています。



特別賞

設計部門



築地川公園～都心の街区公園の改修

株式会社森緑地設計事務所

山元 誠・菅原智子・藤田 一・紀伊國友紀・石坂佑圭

築地川公園は中央区明石町に位置し、隣接して聖路加国際病院や築地本願寺や築地場外市場があり、働く人や観光客など昼間人口の多い地域です。本公園は、かつての築地川の川床の一部が首都高速10号晴海線の一部となる予定でトンネル化され、その上にできた公園です。したがって公園は延長371mの細長い形状をしています。完成後30数年が経過し、施設の著しい老朽化や利用者のニーズの変化に対応できなくなっていることから、区民に支持され愛される公園に向けて改修することになりました。

コンセプト

街区をつなぎ、人々の暮らしに潤いを与える緑の帯

～地域の環境の質を高める公園

築地川に築かれた細長い公園の近隣には二つの地下鉄駅があり、公園の周囲を大学や病院やオフィスやマンションなどのビルに囲まれ、大勢の人々の生活の場となり、30数年前に作られた当時は周囲の環境が大きく異なります。こうした環境の変化に合わせて、築地川公園には新たな役割が求められています。すなわち、街区をつなぎ歩行者動線として、近隣で働く人々や居住者に潤いを与える場として、そして近隣の緑と一体となって地域環境の質を高める緑の帯としての役割です。

作品概要

作品名—— 築地川公園～都心の街区公園の改修
所在地—— 東京都中央区明石町10番2号
発注—— 東京都中央区役所水とみどりの課
設計—— 株式会社森緑地設計事務所
設計協力—— 小林弘明 株式会社バセオ
エム設備設計 君塚光男 松下文子
監理—— 中央区役所水とみどりの課
施工—— 王子・富士建設共同企業体
設計期間—— 平成28年7月～平成31年3月
施工期間—— 平成30年8月～令和2年3月
規模—— 10,410㎡
主要施設—— エントランス広場、せせらぎ、芝生広場
子どもの遊び場 お花見広場 デイキャンプ場
草地広場 紅葉の林 春の庭他

作品評

本作品は、周囲に大学やオフィス、マンションなどが建ち並ぶ立地にあり、築地川支川のトンネル上にある「築地川公園」の改修設計を行った業務である。
応募者は、地域の歴史的背景や社会的・自然的条件、公園の利用状況などを丁寧に調査し、再整備に向けて、公園内部の改善に留まらず街区公園として地域に果たす役割を再構築し、人々の暮らしや地域環境に資するコンセプトを実現するために一貫性ある設計を行っている。
築地川公園では現在、サラリーマンや親子連れ、高齢の方など多くの人々が休憩、遊び、ランチ、スマホ・パソコンの操作をするなど、屋外で思い思いに過ごしている。コロナ禍の状況の中で身近な公園の存在と活用が見直されており、本作品はニューノーマルの動向に対応する公園の活用方法を示唆する改修設計であり、まさに今回の特別賞にふさわしいと評価された。今後の利活用の展開が期待される作品である。

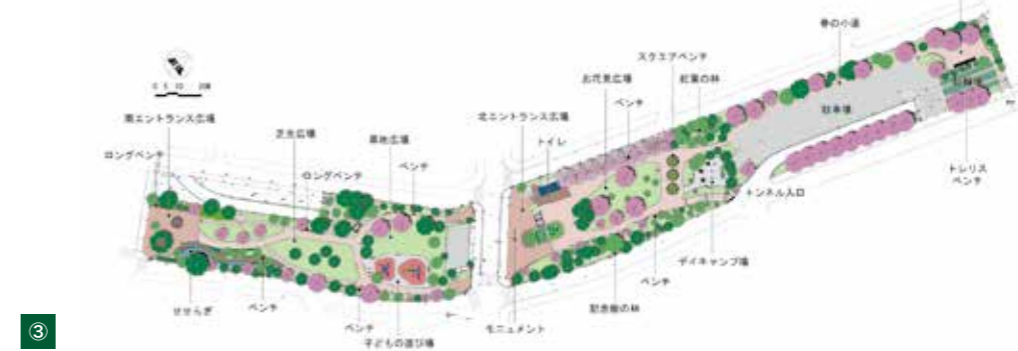
設計部門



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

①築地川公園の位置 ②子供のあそび場付近の断面図 ③全体平面図 ④既存のモニュメントを活かしたエントランス
⑤せせらぎ沿いの散策路 ⑥お花見広場と休憩スペース ⑦子供のあそび場と草地広場

再整備の具体的展開

かつての川を樹木や芝生に覆われた緑の帯に代え、その中を移動する人、散策する人、ベンチで憩う人、芝生や遊具で遊ぶ親子など、人々の日々の暮らしに潤いを与える場として設計しました。とりわけ、昼間人口の多い地域であるため、近隣で働く人々がお気に入りの場所として心地よい時間を過ごせるように十分な量のベンチを配置しました。

トンネル上部の公園とは思えないほど緑豊かな景観づくりを行うとともに、安全安心の観点から見通しの良い空間づくりが求められており、これらを両立すべく、既存の樹木を活かしながら、新たに四季の色どりが楽しめる高木と低木・地被による

見通しの良いすっきりとした景観づくりを行いました。

既存の公園はハンディキャップのある人には不親切なつくりでした。改修後の公園は、健康者のみならず、車いす利用者からベビーカー利用者や高齢者まですべての人に愛され、利用しやすい公園を目指して設計しました。

川の記憶を公園にとどめるために、古い備前橋と暁橋と堺橋の橋名板をかつての橋の近くに解説板とセットで設置するとともに、水の記憶として自然な雰囲気のあるせせらぎを象徴的に設け、潤いのある空間整備の一端としました。

CLA賞の趣旨と募集・選考のあらまし

CLA賞選考委員長 **阿部 伸太**

CLA賞は、会員の優れた作品や業務を顕彰し、協会内部だけでなく広く社会に紹介することを目的として設けられたもので、ランドスケープ分野のプロフェッショナルが行った仕事をプロが評価し、優秀なものを表彰するというシステムに特徴があります。

同時に、応募者は自己が実施した業務の成果について、改めて応募資料という形に取りまとめるため、個々の業務の再チェック、すなわち品質保証の一翼を担うという面からも、機能するものでもあります。

応募作品の募集は、例年に従い、4月上旬から始め、7月末を期限として行いました。その結果「設計」「調査・計画」「マネジメント」という3分野で、6社から7作品の応募となり、コロナ禍の中で積極的な活動が行いにくい状況を考慮すると、理解できないことはないものの、残念な結果となりました。応募くださった皆様には厚く御礼申し上げますとともに、会員各社ならびに技術者皆様のより一層の研鑽を期待する次第です。

今年度応募された作品は、いずれも力作ぞろいで、身近な公園の改修に真摯に、そして丁寧に取り組まれたものから、緑化フェアの会場設計など非常に多様な作品が、揃いました。各委員は、事前に配布された応募作品の資料に対して募集要綱に示された「設計」「調査・計画」「マネジメント」部門毎に、それぞれ5つの視点から評点を付け、選考会当日に集計しました。

選考会では、こうした集計結果を参考として、改めて各作品毎に賞を付すにふさわしい作品が否かについて討議し、最優秀賞1作品、優秀賞4作品、特別賞1作品、を選出いたしました。最優秀賞の作品は、ランドスケープ作品として秀逸で、選考委員全員の一一致した意見で決まりました。特別賞の作品は、その丁寧に仕事ぶりが評価され特別賞となりました。

年々、提出されるプレゼンテーション資料の質が向上しており、今年もこの傾向は顕著に確認されました。一方で、業務の中でコンサルタントとして携わった部分が不明瞭だったり、その作品の「売り」や「新たな発想」の取組が弱かったり、また、提示された写真や図面の狙いが十分表現されていない、等の点も指摘されました。プレゼンテーションのレベルが上がるにつれ、要求される内容も濃くなる、ということでしょう。差が出た部分は、大半の要因がこの部分でした。やはり、コンセプト

やプロセスに係わる部分が、丁寧に、かつ解りやすく表現されたものが優位に評価されました。

社会に対してランドスケープという職能を如何にアピールするか？ その答えは、こうした良質なランドスケープ作品を世に送り出し続けることだと考えます。CLA賞はそうした意味からも、単なる顕彰制度にとどまらず、ランドスケープコンサルタントの技術力向上に繋がるとともに、社会へアピールする材料として活用されることも含め、会員企業や技術者の皆様の糧になることを願って、選考結果のご報告といたします。

作品の応募と選考結果

部門	応募	最優秀賞	優秀賞	特別賞	奨励賞
設計	5点	1点	3点	1点	該当なし
調査・計画	1点	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
マネジメント	1点	該当なし	1点	該当なし	該当なし
計	7点	1点	4点	1点	0点

選考委員

委員長	阿部 伸太	東京農業大学准教授
副委員長	内藤 英四郎	CLA 理事
委員	五十嵐 康之	国土交通省都市局 公園緑地・景観課課長
委員	石井 ちはる	CLA 技術委員長
委員	卯之原 昇	(一社)日本造園建設業協会技術委員長
委員	木下 剛	千葉大学大学院准教授
委員	篠沢 健太	工学院大学教授
委員	橋 俊光	(一社)日本公園緑地協会常務理事
委員	塚原 道夫	CLA 広報委員長
委員	諸井 泰司	全国1級造園施工管理技師の会(一造会) 技術部会長

2020年CLA賞 受賞技術者プロフィール

奥山伊作 (おくやまいさく)



2005年株式会社ブレック研究所入社。本社都市・文化部門ランドスケープデザイン部部長。2015年から高田松原津波復興祈念公園の空間デザイン・施設デザインを担当。本公園の国営追悼・祈念施設で、「復興デザイン会議第1回復興設計賞」を受賞、日本造園学会「ランドスケープ研究 技術報告集」に論文を共著。

前澤洋一 (まえざわよういち)



1976年株式会社ブレック研究所入社。専務取締役。環境計画、地域計画、景観計画等に従事。2011年の震災直後から国土交通省、岩手県、陸前高田市業務を通じて市の復興に係るさまざまな事業に中心となって携わり、業務全体を統括。

酒井 学 (さかいまなぶ)



1993年株式会社ブレック研究所入社。本社環境計画部門統括部長・三陸復興事務所所長。2011年の震災直後から国土交通省、岩手県、陸前高田市業務を通じて市の復興に係るさまざまな事業に従事。高田松原津波復興祈念公園も検討当初から継続して従事し、現在は公園における市民協働の取り組みを支援。

森田 緑 (もりたみどり)



2010年株式会社ブレック研究所入社。本社都市・文化部門ランドスケープデザイン部次長。動物園設計・研究センターに配属され、全国の動物園における計画・設計に従事。その後、高田松原津波復興祈念公園の基本設計・実施設計を担当。

宮脇侑子 (みやわきゆうこ)



2015年株式会社ブレック研究所入社。本社環境計画部門環境計画1部主査。2015年から高田松原津波復興祈念公園の基本計画策定、植栽設計等を担当。現在も引き続き祈念公園の管理運営検討や市民協働の取り組み支援に従事。

赤嶺太紀子 (あかみねたきこ)



神奈川県出身。2003年日本女子大学家政学部住居学科卒業後、同年高野ランドスケーププランニング株式会社入社。北海道清水町十勝千年の森、大雪山国立公園然別湖畔園地などの山地森林や、農村部の農場ランドスケープ、観光庭園などの計画・設計に従事。人の営みや自然とともに育つ豊かな場のデザインを目指している。登録ランドスケープアーキテクト、技術士(建設部門・都市および地方計画)

高野文彰 (たかのふみあき)



1975年に高野ランドスケーププランニング株式会社設立、2011年まで代表取締役を務め現在取締役会長。1980年国営沖縄海洋博覧会記念公園「ちびっことりで」で日本造園学会賞をはじめとして受賞多数。IFLA国際ランドスケープアーキテクト連盟 アジア太平洋地区会長を2019年より務める。自著「ランドスケープの夢-Dream of Landscape」を建築資料研究社より2020年3月に出版。

上田悦路 (うえだえつじ)



兵庫県淡路市出身。1988年東京理科大学理工学部研究科建築学専攻修了、株式会社コトブキ入社。1995年高野ランドスケーププランニング株式会社入社。コトブキでは主に遊具設計、高野ランドスケープでは主に公園等の計画ワークショップ・実施設計・現場監理に従事。代表的公共プロジェクトは、国営滝野すずらん丘陵公園こどもの谷、道立十勝エコロジーパーク、札幌市旭山記念公園再整備など。

山地弘起 (やまひろき)



1983年兵庫県出身。2008年近畿大学大学院農学研究科修了、高野ランドスケープ入社。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)。公園や商業施設外構の計画設計・監理・管理運営、自力建設型ワークショップの企画・実施などに従事。実感の持てる設計をしたいと思い、山に移住。解体・土木・設備・大工・造園までセルフビルドで建設。

小林真幸 (こばやしまさき)



1977年長野県生まれ。2003年千葉大学大学院自然科学研究科修了。同年(株)公園緑地設計事務所(現KRC)入社。現在、地域計画室室長。認定NPO法人日本都市計画家協会理事。主に自治体の総合計画や都市計画、土地利用や景観、緑の計画・制度の立案に従事。技術士(建設部門・農業部門・総合技術監理部門)、公園管理運営士。

藤村忠志 (ふじむらただし)



長野県出身。1993年信州大学農学部農学研究科修了後、1994年公園緑地設計事務所(現KRC)入社。主に長野県内の公園・緑地、地域振興関連施設等の整備・利活用についての調査計画業務に携わる。技術士(建設、総合技術監理、森林部門)、公園管理運営士。

三澤陽平 (みさわようへい)



1976年長野県生まれ。1998年中央工科大学土木工学科造園景観専攻卒。同年(株)公園緑地設計事務所(現KRC)に入社。現在、取締役事業推進室長として、主に公園緑地、都市緑化推進、まちづくりの企画・調査計画・設計に携わる。休日は農村景観維持のため農地や山林の草刈りに奮闘中。

田口ちはる (たぐちちはる)



1973年長野県生まれ。1997年京都芸術短期大学(現京都芸術大学)専攻科(日本画コース)修了。1998年(株)公園緑地設計事務所(現KRC)に入社し、信州の公園・緑地の調査・計画・設計に従事。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)。北信美術会会員。

亀山 涼 (かめやまりょう)



2001年信州大学大学院農学研究科森林科学専攻修了、同年に株式会社KRC入社。長野県内の都市公園の整備等に関する調査・計画に従事。信州フェアを通じて発足した、県民協働で花緑あふれる地域づくりに取り組む「信州緑花ネットワーク」の事務局を担当し、会員による緑花活動、講座のコーディネートにも携わる。樹木医。

長峯史弥 (ながみねふみや)



1994年長野県長野市生まれ。2014年長野工業高等専門学校環境都市工学科卒業、2016年同生環境システム専攻終了。同年株式会社KRC入社。地域計画室に所属し、主に都市計画関連の計画策定業務に従事。信州花フェスタ2019に携わったことを機に、日本家庭園芸普及協会が認定するグリーンアドバイザーの資格を取得。

宮入賢一郎 (みやいりけんいちろう)



1963年長野県生まれ。技術士(建設部門、環境部門、総合技術監理部門)。株式会社KRC代表取締役社長、国立長野工業高等専門学校客員教授、長野県林業大学校(造園学)非常勤講師。NPO法人CO2バンク推進機構理事長、一般社団法人社会活動機構理事長他で社会貢献活動に取り組む。

宇戸睦雄 (うどもつお)



1960年京都市生まれ。京都芸術短期大学卒業。(株)空間創研取締役会長。登録ランドスケープアーキテクト、技術士(総合技術監理部門)、樹木医。調査(植物、土壌)、設計、文化財保存活用に関する計画設計に従事。

後藤逸成 (ごとういつなり)



1973年愛知県生まれ。名古屋造形芸術短期大学造形芸術学科卒業。1995年株式会社空間創研入社。現在、同社代表取締役。主に都市公園の計画、設計及び近年の全国都市緑化フェア(奈良、鳥取、信州)の一連の業務に従事。技術士(建設部門:都市及び地方計画)、登録ランドスケープアーキテクト(RLA)。

荘田隆久 (しょうただかひさ)



1972年大阪市生まれ。1994年京都嵯峨美術短期大学環境デザイン学科卒業。現(株)空間創研取締役。主に集合住宅から商業や医療、教育施設、公園など、多岐にわたる屋外空間の計画・設計・監理に携わる。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)、RCCM(造園)。CLA関西支部広報委員長。

古屋 章 (ふるやあきら)



1959年岡山県新見市生まれ。1982年京都芸術短期大学卒業。(株)空間創研設計部長。主に公園緑地の基本設計、実施設計に従事。その場の必然と魅力ある情景づくりを妄想中。

佐久間 徹 (さくまとおる)



1969年生まれ。平成26年7月、(株)塚原緑地研究所入社、千葉ポートパーク及び千葉ポートタワーの指定管理者業務を経て、現在は千葉市ふるさと農園の管理運営に携わる。

金井拓見 (かないたくみ)



1976年生まれ。専門学校東京ビジュアルアーツ卒。フェデックス・キンコーズ株式会社、株式会社デジサーフを経て、現在は(株)塚原緑地研究所の企画開発部門マネージャーとして、主に新規施設の開業準備を担当。

山元 誠 (やまもとまこと)



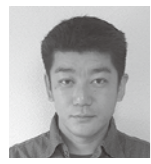
1982年、ルイジアナ州立大学大学院ランドスケープアーキテチャー修士課程終了(MLA) 1985年、(株)森緑地設計事務所に入社。長年にわたって公園・緑地の計画、設計に携わってきた。代表作:浜松市フルーツパーク、古代蓮の里、都立小山内裏公園、都立シンボルプロムナード公園など。技術士、RLA

菅原智子 (すがわらともこ)



東京都出身。平成元年(株)森森緑地設計事務所入社。事務職からCADオペを希望して設計に異動。現在に至る。藤沢市神台公園、練馬区立美術の森緑地、中央区月島川緑の散歩道など。地域に愛される公園づくりのお手伝いができれば幸いです。

泉 崇 (いずみたかし)



1997年金沢美術工芸大学卒業。同年、(株)空間創研入社。公園緑地の実施設計を主体に、様々な業務に携わる。「場」の特性を見つめ、時間の経過とともに心地よく魅力的なものとなる「場づくり」を目標に仕事に取り組んでいる。

多田祥子 (ただしょうこ)



1984年生まれ。同志社大学文学部卒業後、大阪工業技術専門学校建築学科II部卒業。現在は(株)空間創研に所属。公園や建築外構、植栽のデザイン・設計に携わる。人の居場所づくりや親子のためのランドスケープ、四季の草花を楽しめるランドスケープに興味がある。登録ランドスケープアーキテクト(RLA)。

山川弘子 (やまかわひろこ)



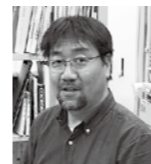
1981年生まれ。岐阜大学大学院工学研究科土木工学専攻修了。大学院で都市景観評価を研究。河川計画、河川環境調査などの建設コンサルタント業務を経験して一念発起。現在は(株)空間創研に所属。全国都市緑化フェアや公園設計に携わっている。水辺のランドスケープづくりに興味がある。技術士(建設部門)。

徐 蓉 (じょよう)



中国広西チワン族自治区出身。中国の大学でランドスケープデザインを学び、2014年日本へ留学。2018年京都市芸工芸大学大学院建築学専攻に入学し、まちづくりに関する研究を行った。2019年大学院卒業。同年(株)空間創研入社。

藤田 一 (ふじたはじめ)



愛知県生まれ。平成5年東京農業大学短期大学部卒業後、(株)森緑地設計事務所入社。主に、公園の実施設計業務に従事している。短大時代に公園設計の道を知り、自分の子供に自慢できると単純な思いから始めて、実際に息子の幼少期に感謝され、今度はひそかに孫にと思い日々の業務に励んでいる。最近では、南町田グランベリーパークの鶴間公園の設計に携わる。

紀伊國友紀 (きいくにゆき)



2002年千葉工業大学工学部土木工学科卒業。橋梁建設会社を経て、2006年株式会社森緑地設計事務所に入社。主に、公園緑地の基本設計、実施設計等に従事。

石坂佑圭 (いしざかゆか)



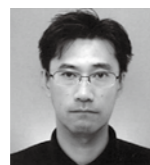
2011年小山工業高等専門学校専攻科建築学専攻修了。ショッピングセンターにて運営事務・設備保守・工事管理を経た後、クリエイティブな仕事を求めて2016年株式会社森緑地設計事務所入社。主に公園緑地の基本計画、設計に従事。

棚瀬新一郎 (たなせしんいちろう)



1984年東京デザイナー学院造園デザイン科卒業。1985年(株)ブレック研究所入社、現在ランドスケープデザイン部部長。都市公園を主体に多様なランドスケープの計画・設計・監理に従事。登録ランドスケープアーキテクト資格制度の普及、新たなランドスケープ・イニシアティブの展開活動などにも取り組んでいる。

山口朋浩 (やまぐちともひろ)



1969年神奈川県横浜市生まれ。1992年東京農業大学造園学科卒業。同年株式会社ブレック研究所入社。環境設計・緑化・自然環境保全に従事。動植物園や文化財等も含めた幅広い「環境」をキーワードとした企画開発に取り組む。株式会社ブレック研究所九州事務所事務所長。技術士(建設部門、環境部門)。

青木 晋 (あおきしん)



1976年広島県広島市生まれ。2001年千葉大学大学院自然科学研究科卒業。同年株式会社LAT環境クリエイティブに入社。自然と文化を大切に公園緑地の計画・設計や、地域資源を活かしたまちづくりの支援に力を入れている。株式会社LAT環境クリエイティブ環境設計部長。技術士(建設部門)。

森本 直 (もりもとなお)



1993年広島県広島市生まれ。2016年広島工業大学環境学部環境デザイン学科卒業。同年株式会社LAT環境クリエイティブに入社。公共空間や企業の緑地における植栽デザイン、花壇デザインに取り組んでいる。株式会社LAT環境クリエイティブ環境設計部技師。

松崎 淳 (まつざきあつし)



1968年広島県庄原市東城町生まれ。1992年大阪大学工学部環境工学科卒業。同年(株)ブレック研究所入社。2015年クリエイティブ集団(株)TONZAKOデザイン設立。代表取締役。動物園、花、遊び場などのランドスケープ設計、展示設計などに従事。

高瀬佐子 (たかせさわこ)



1975年岐阜県各務原市生まれ。1998年岐阜大学農学部生物生産システム学科卒業。その後社会人を経て2004年に岐阜県立森林文化アカデミー卒業。現在(株)TONZAKOデザイン所属。「生物多様性」をキーワードにナチュラルなランドスケープデザイン、また、動物園設計、フラワーランドスケープデザインなどに日々挑戦中。技術士(建設部門)。

塚原道夫 (つかはらみちお)



1951年生まれ。造園建設会社を経て(株)塚原緑地研究所を設立し代表取締役就任。活動範囲はランドスケープのデザインからランドスケープのマネージメントに及ぶ。公園、宿泊、温泉、道の駅など幅広い事業を展開している。公共施設を拠点として、『地域づくりの核となるランドスケープ』を実践している。

斉藤久芳 (さいとうひさよし)



1955年生まれ。千葉市職員として長年、公園緑地及び自然保護行政に携わる。2016年から千葉ポートタワー、千葉市ふるさと農園、昭和の森等の指定管理者業務に携わるとともに、千葉市の花「大賀ハス」の普及宣伝に努めている。